

---

# 真夜中の鳥

アザとーさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真夜中の鳥

### 【Zマーク】

Z2288Z

### 【作者名】

アザヒーちゃん

### 【あらすじ】

落ちこぼれ死神が地上に降り立つた。

彼女の使命は人間の『喜怒哀楽』を回収することなのだが……

## 始まりの夜

### 始まりの夜

申し分のない月明かりが、その夜を明るく照らしていた。こんな夜には、人ならざる者たちが宵闇の中に降臨する。今まさに、一人の少女が地上に足をつけようとしていた。背中には巨大な鳥の翼が生えている。漆黒のソレは、異界より羽ばたき続けて疲れ切つてはいたが、ふわりと優しく地上に降り立つた。

「よう、クルエボ。相変わらず美しい羽根だな。」

「ウモリの羽をひらめかせて隣に降り立つた少年に、彼女は感情の無いガラス玉のような瞳で答えた。

「ここではその名前は不自然だ。『小夜子』と呼んでくれ。」

「小夜子ちゃんねえ。美しい名前だな。俺にもこっち風の名前、つけてくれよ。」

「『チャラ男』」

少女はそれだけ言い放つと、少年への興味を全く失ったかのようになそっぽを向き、何かをつぶやき始めた。その小さな唇の中であらしが吹き荒れるような音がもれ、巨大な翼がみるみる内に縮んで……ついには消えた。

翼を持たない姿は、どこにでもいる「く普通の少女と何ら変わりない。」

よほど構つて欲しいのか、その『変身』をじつと見ていた少年が、再び口を開いた。

「しかし、めんどくさい事させられてんな。人間の『喜怒哀楽』を回収するんだっけ？」

「仕方ないだろう。人間の魂は、その大半が感情と言う成分でできている。だが、私にはいまだに『感情』というものが理解できない。」

「そうだな、だから落ちこぼれたんだもんな。」

ストレートな悪口にも、少女はその美しい眉ひとつ動かさない。

「まあ、どうしてもダメなら？俺が嫁にもらってやるよ。」

「ありがとう、チャラ男。そうならないように善処する。」

「つれないねえ。ま、俺はその辺で適当に仕事をしてるから、困ったことがあればすぐに連絡してくれよ。」

「仕事は適当にやるものじゃない。」

「はいはい。『善処します』よ。」

少年はいかにもチャラいじぐさで、ひらひらと手を振つて飛び立つた。

すでに都会のネオンを移していいる彼女のガラスの瞳には、そんな彼の姿は映らなかつた。

小夜子は、夜のネオン街の喧騒の中をあてどなくさまよっていた。男たちは好色の眼差しで彼女を振り返るが、その神々しいまでの美しさに声をかけあぐねていた。

雑踏のにぎわいの中でも、小夜子を包む静寂が破られることは無かつた。突如、勇者という名のＫＹが現れるまでは。

「かわいいね、何ちゃん、何ちゃん？」

男は酒臭い息を小夜子に吐きかけ、なれなれしく肩を抱き寄せた。

「小夜子ちゃんだ。」

彼女の答えは全く何の感情もこもっていない。質問に答えを返し�ただけの味氣ないものだったが、その男を有頂天にさせるには十分だった。

「小夜子ちゃん。暇なあ、カラオケとか、おじさんと行っちゃいませんか？」

「カラオケ……それに行けば、お前は嬉しいのか。」

「小夜子ちゃんと一緒なあ、どこでも嬉しいよ。ホテルなら、なあ嬉しいかな？」

彼女はしばらく黙つて、頭の中でその単語を検索する。

「ああ、すまんな。『そういう機能』は持ち合わせていらないんで、カラオケで頼む。」

「小夜子ちゃんは、商売の人じゃないんだね。オッケー、オッケー。」

「何だか会話がかみ合つていらない事すら気にせず、男は小夜子の手を引いた。

「小夜子、先に歌いなよ！」

狭い密室で気の大きくなつた男は、すでに小夜子の隣にぴったりと寄り添い、ご機嫌でマイクを突き付けてくる。

「歌はよく知らん。お前が歌うがいいぞ。」

男は不服そうに口をとがらせた。

「え～、歌つてくんないと、おじさんつまんない。」

「『つまんない』……嬉しくないという事だな。お前はカラオケに行けば嬉しいと言つたのに、嬉しくないんだな。」

「そうだよ～。つまんないよ。」

「ならば、お前の『嬉しい』とはなんだ？」

男はへらへらと笑いながら小夜子にすり寄つてきた。

「え～、女の子とこいついう事が出来て、おいしいものが食べられて、後は……車！かつこいい車とか買えちゃうと、嬉しくなるかな。」

「買えばいいじゃないか。」

「わかつてないな。サラリーマンつて、そんなにお金持ちじゃないよ。生きていくには困んないけど、贅沢するお金なんかないんだよ。」

「お金……そ、うか、ここでは何をするにもそれがいるんだつたな。小夜子は出会つてから始めて、真つ直ぐに男の顔を見た。

「お金があれば『嬉しい』か？」

「そりゃあ嬉しいよ。くれるの？お金。」

「くれてやる。これを持つていろ。」

小夜子は小さなストラップを取り出し、男に握らせた。

「あ～、残念。スマホだから、ストラップは使わないんだよ。」

「ならば鞄にでもつけておけ。」

男は酔いのまわつた、どろりとした眼差しでそのストラップを確かめた。何の変哲もないそのストラップのアクセントには、道端で拾つたような地味な黒っぽい石がついている。

「いやー、若い口からプレゼントなんて嬉しいねえ。」

男の瞳が、酔いでさらに淀んだ。

「いいか、机身離さず持つていろよ。」

その声は、深い酔いと眠気にとらわれた男の耳にも強く残つた。

数時間は眠れただろうか……

男はだるい酔いの中から起き上がった。この密室の中には彼女の姿は無い。

「……！」

男は慌てて、ポケットの中身をテーブルの上に並べた。

財布……ある。カードや定期の類も……揃っている。スマホは……これは妻を拌み倒して買った、いま一番の宝物だが……ある。

昨夜小夜子がくれた小さな石のついたストラップが、スマホに引つ張られて床に落ちた。

「変わった」……だつたな。」

少し酔いの冷めた今、その会話のちぐはぐさに改めて違和感を感じる。

「これは……捨ててもいいか。」

ストラップを指ではじいたまさにその瞬間、テーブルの上でスマホが激しく振動した。

「もしもし……」

反射的に電話を取つてしまつたあとで、男は後悔した。ディスプレイに表示されているそれは、見たこともない番号……。

電話の向こうから聞こえてきたのは、昨夜の彼女の冷静な声。

「それは捨てるな。」

「ええつ、どこかで見てる?」

「見てはいない。人間の行動パターンを解析した結果だ。」  
やつぱり変わつたコだ。

「あのー、昨夜のことなんですけどね。奥さんにばれると……」

「『オクサン』には興味がない。とりあえず、こちらの言つとおりにしろ。」

「言つ通りにすれば昨夜のことは?」

一瞬、電話の向こうでおかしな間があった。

「ああ、オクサンに言わると困るんだつたな。ならば黙つていよいよ。」

「う。」

「じゃあ、言つとおりにするよ。何をすればいい？」

「今から言つ事をメモしや。そして、そこに行つて宝くじを買え。」

「はい？」

「宝くじだ。まずはスクラッチから行くぞ。」

男は慌てて、手近にある紙ナップキンを引き寄せた。

電話口から聞こえる彼女も声は淡々として事務的ではあつたが、強い強迫観念のようなものを男の中に植え付けた。

メモを片手にカラオケ屋を飛び出す頃には、男はすっかり洗脳されたかのように指示通り、駅ビルを目指して走り出した。

通勤のサラリーマンを狙つたその売り場の朝は、早い。ちょうどビシヤッターを開けている売り場のおばちゃんに、男は早くまくしたてた。

「スクラッチ、バラの、上から三枚目のを！」

おばちゃんは愛想のよい笑顔と、慣れた手つきでくじ券を男に渡した。

男は一気に、柔らかい銀色を削り落す。そこには、同じ絵柄が3つ。

慌てて配当表を見る。絵柄を確認する。そして、驚きの表情を浮かべるおばちゃんの顔を見るに至つて、男は初めてそのことを実感した。

「一等ですよね。」

「はい！おめでとうござります。」

男は改めてあたりのくじ券を、そして、少しよれつとした紙ナップキンのメモを見た。

これはもしかして、本当に？

男の頭からはこれから行かなくてはならない会社のこと、そして、妻に外泊の言い訳を電話しなくてはいけない事も、きれいさつ

ぱり消え去った。

「今日は忙しくなるぞ！」

男は、電車に乗るために走り出した。

もちろん、紙ナプキンのメモに書かれた次の目的地を確かめながら。

(3)

男がメモに書かれた売り場を回り終わる頃には、すでにあたりは夕闇に包まれていた。

やつと興奮のひと段落した彼は、その時初めてポケットの中で着信のメロディーが鳴っている事に気がついた。

電話に出ると、淡々としたあの少女の声。

「お金はたくさんになつたのか？」

男のポケットは、現金と当たりくじでふくれあがっている。

「それで、お前の『嬉しい』を買え。」

短い電話はそれだけで切れた。

そのあとの画面には、着信を知らせるマークが浮かんでいる。

「やばい！忘れてた。」

着信画面を開くと、会社から、妻から、会社から、妻から、妻から、妻から…。

男が電話にすら気付かないほど夢中になつていてその間に、着信は限界を超えている。

そして充電も……バッテリー切れの警告音が鳴り、画面が暗くなつた。

「まあ、いいか。」

奮発して、あいつの欲しがっていたブランドのバッグでも買って帰ろう。後は、何だか有名だつて言つてたややこしい名前のケーキと……定番の花束かな。

男は、ポケットの中は重く、足取りは軽く歩き始めた。

抱えきれないほど荷物を抱えた男を玄関で出迎えたのは、山のように積まれた段ボールと、大きな旅行用の鞄だった。

リビングでは、妻がうつむいてソファに座っている。

男が買い物の包みをテーブルの上に置くと、妻は顔も上げずに言

つた。

「どこに行っていたの。」

その淡々としたしゃべり口は小夜子を連想させる。

いつも、キレて罵りかかってくれる方がわかりやすいの。」

男は妻の手にブランドのロゴの入った紙袋を握らせた。

「欲しことて言つていただき。仲直りのプ・レ・ゼ・ン・ト。」

しかし彼女は夫の存在を全て拒否するかのよひ、その紙袋を床に置いた。

「今日はどこに行つていたの。」

「会社のことか? 心配しなくとも、あんな会社やめたつていいんだよ。」

「どこに行つていたかつて聞いてるのよ!」

同じことを三度も言わされた彼女の怒りが堰を切つたようにあふれ出し、男の浮かれた心を引き飛ばした。

「昨夜だつて2次会の途中で帰つたつていつのに、そのあとは何をしていたの! もう、あなたつてば、毎回信用できないようなことばかり……」

「落ち着けつて。そんなに怒らなくとも、お前が心配するようなことは何も無かつたよ。昨夜は。」

「じゃあ、昨夜以外は!」

「だから、悪かつたつて! 反省して、こんなにお前のものばかり買って来てやつただろ!」

男も大声をあげた。こうなると、二人の間にはもう罵りあいしかない。

激しい口戦に止めを刺すように、妻はひときわ大きく叫んだ。

「もう、本当に無理! お金がどうとか、物がどうとかじゃないの! 無理、無理、無理!」

逃げるよひに玄関を飛び出していく彼女を、男は追い掛けことさえしなかった。

「無理なのは俺の方だよ! これだけ金があれば、女なんか選び放題

なんだからな。」

男の悪態を受けるべき妻の姿はもうない。

男は件のストラップを恭しく取り出し、大事そうに撫でまわした。

「さあ、幸運の女神ちゃん、また電話しててくれよ。」

ストラップに付けられている口の表面に、紅い輝きがほんの一瞬、

走った。

翌日から男の生活は一変した。

小夜子から定期的にかかる電話はいつも事務的ではあつたが、その指示に従つてさえいれば株でも、ギャンブルでも、彼の手元に莫大な富をもたらすものだった。

金があれば女は蠅のように群がつてくる。彼は躊躇することなく、妻から送られてきた離婚届に判を押した。

派手な車を乗り回し、女達をはべらせりようになつた彼にとつて、家はただ寝に帰る場所にすぎない。

その日もゴージャスに遊びまわつた彼は、疲れた体を横たえるためにドアを開けた。

誰も返事する者がいなくなつてから、彼は『ただいま』を言わない。機械的に鍵を閉め、靴をだらしなく脱ぐだけだ。

男はリビングに明かりを入れ、ソファにその身を投げ出した。いつものように、小夜子からの電話が鳴る。

彼女の電話は、まるで見ているかのように、彼が一人になつた時だけかかるてくる。

今日も彼女の声は事務的だが、男はとびきりの愛想で応えた。

「はいはーい。次は何で儲けさせてくれるんですか。」

「次は、そのストラップを回収させてもらひつ。」

男の背中で、不安がぬるりと動いた。

「ストラップ? まさか、返しちゃつたらもう電話してくれない、なんてことは無いよね。」

「電話はもうしない。」

「返さなかつたら?」

「返さなくてても、結果は同じだ。どうせお前は、もつ電話に出る」とはできない。」

理由のない不安が、ぬるりぬるりと体中を這いまわる。

「電話に出ることができないって、どういう事?」

「今夜、お前は死ぬ。」

声が電話からではなく、すぐ耳元で聞こえた。

男は恐怖という反射で振り向いた。

「ストラップをこちらに。」

そこには電話を耳にあてた小夜子と、もう一人、チャラやうな少年が立っていた。

少年の背中には本来なら羽を持つ唯一の哺乳類についているべき、あのいやらしいハネが、その体にふさわしい大きさに拡大されて生えている。骨ばって、薄い膜をまとったそれは悪魔をほうふつとさせる。

「おまえら、何者なんだ!」

「何者?」こっちの言葉で言つと……ディオス? ハロス?」

少女は美しい唇の中で呟きながら少し考え込んだ。

「……ああ、死神……だ。」

「死神!」

ハネを生やした少年がげらげらと笑いだした。

「ダメだよ、そんなストレートに言つちゃあ。それに、お前は正式な死神じゃないじやん?」

「そうか、すまんな。次は気をつける。」

男の腰から下が恐怖でがたがたと震えだした。

「じゃあ、俺が死ぬってのは!」

「ああ、ごめんねえ。上の決定だから、クームは俺じゃなくて上に言つてね?」

少年が柔らかな笑顔を浮かべた。

「でも彼女おかげで、死ぬ前にいい思いできたじやん? あんたラッキーだよ。」

一階のどこかで、ガラスが割られる音がした。

「助……助け……」

「すまないな。私にはそこまでの権限は与えられていない。」

男の脚はあるでその機能をすっかり失つてしまつたかのように動かない。

その間にも、何者かがバタバタと一階を物色している。

「じゃあ僕たちは『全て』が終わったころにまた来るよ。エンジョイ

」

少年が小夜子の肩を抱き、飛び上がる。

「待……待つて……」

差し出された男の手は、一人が消えた空を虚しくつかんだ。一階を歩きまわつていた強盗たちの足音が階段を下りてくる。そのリズム感の狂つた葬送曲が男の最期を華々しく彩つた。

小夜子は血だまりの中からストラップを拾い上げ、そこで口で血を拭つた。

ストラップの石が、暗い赤に染まつてゐる。それは床の血だまりを吸い上げたような痛々しい輝きを放つ朱だ。

「これが……喜び?」

血だまりの主は強盗に刺された傷口をさらしたまま、すでに答えることはない。

「もつときれいなものなのかなと思ったのだがな。」

少年は彼女の手元を覗き込んだ。

「一応『喜びの赤』は出でているようだし、いいんじやないかな。」

「そうか。」

小夜子はストラップを乱暴にポケットに突つこんだ。

「次は『怒りの黄色』の回収に向かう。」

「おお? もう行くのか。俺はこいつの魂を回収しないといけないから、一緒に行つてやれないぞ。大丈夫か?」

彼女は何も答えずに彼に背を向けた。

その美しさゆえ、無表情ゆえにその行為は怒つてゐるよつとも感じられる。

彼は思わずその背中に声をかけた。

「クルエ……小夜子、人間を見ろ！もつとちゃんと人間を見ろ！」

## 第2章 「怒」

その男は怒っていた。

「トロい運転しやがって！」

強くアクセルを踏み込み、愛車の鼻先を前の車にすりつけようつにあおつた。

何がそういうせるのか。あえて言つなら『若さ』とこゝものだらう。夜道をとろとろと走る車は左にウインカーを出し、大きく道を譲つた。

「よし、それでいいんだよ！」

アクセルをほぼベタに踏み込み、ポンコツ運転を大きく引き離す。このままどこへと聞かれれば、特にあてがあるわけでもない。ただ、若さゆえに胸の内にたまつた得体のしれないこの怒りを、路面にぶちまけたい気分だ。

誰もいない田舎の直線道を、男はメーターが降りきれるほどに飛ばしていた。

「……！」

ヘッドライトが描く光跡のハジに、可憐な少女の姿が照らし出される！

足を突つ張つてブレーキをかける！

車は叫ぶようなブレーキ音をあげて軋む。

「ドン！」

みるみる近づいてきた少女の体がボンネットの上を転がり、男の体は衝撃で跳ね上がる。

車は……やつと止まつた。

「あーあーあー、畜生！こんな夜中にふらふらしてんじゃねーよ……」ドアを乱暴に開けて車のフロントに回り込むが、ボンネットにもバンパーにも事故の形跡は何一つ……傷一つついてはいない。

「……？」

男は弾き飛ばされたはずの小柄な体を目線で探した。

暗いとはいって、路面は街灯に寒々しく照らされている。だがそこに、倒れているはずの少女はいなかつた。

「おいおい……勘弁してくれよお。」

地面上に膝をつき、車の下を覗き込む。だが、そこにも彼女の姿は無く、エンジンの熱気を冷たい夜風が吹き飛ばした。

「まさか、お化け……」

「そんな非現実的なものはいない。死は全ての人間を等しく『無に帰すからな。』

小夜子が彼の背後から声をかけた。

振り向いた彼の眼にはその姿がお化け以上に非現実的に見えた。はねられたはずの体には傷一つなく、街燈の明かりに照らされた美しい姿はほのかに光を発しているようにさえ思える。

「今、はねた……」

「そうか、怪我ぐらい作つておけばよかつたな……」

「ちょっと何かを考えているような間があいた。」

「心配ない。私はこの通り、はねられてはいない。」

「そんなバカな！だつて、すごい衝撃があつたぞ。」

「あれだけのスピードだ。急ブレーキをかければ衝撃もハンパ無いのは当たり前だ。」

「じゃあ俺は、ただ単にブレーキを踏まされただけか。」

事故の責任を負わなくてもいいといつ身勝手な安堵が、彼のやり場のない怒りの炎を掻き立てた。

「車道は車が走る所なんだよ。ふらふらとガキが歩いてんじゃねえよー。」

「そうか、すまんな。」

「あんな急ブレーキかけさせやがつてー車にガタが来てたりしたら、弁償させるからな。」

「お前は、なぜそんなに怒つていいんだ。」

「はあ？お前みたいなバカガキがふらふらしてると、みんなが迷惑

するからだよ！」

「『みんな』じゃない。『自分が』だろ。」

小夜子の鋭いほどに美しい瞳が男から言葉を奪った。

「『怒る』とはそういうものなのか。」

小首をかしげてじつと男を見つめる小夜子の背後を、ざあつと夜の風が通り過ぎた。

風に乱れた髪のせいなのか、その強い眼差しのせいなのか。男は小夜子が恐ろしいもののように思えた。

「帰る！俺はお気楽なガキと違つて、忙しい身だからな。」

急いでその場を去ろうと、踵を返す男を小夜子が呼びとめた。

「待て。これを持つていけ。」

それは天然石のブレスレットだ。メンズサイズに組まれた大きめの石は渋い色ながらも質のいい輝きを放つていて。ただ一つ、中央の小さな石を除いては……

その石だけが明らかに異質だった。つやもなく、輝きも持たず、暗いグレーに沈んだそれは道端で見かけるようなただの石だ。だが、その石の存在が男の心を強く引き付けた。

「これは、おわびのつもりか？」

「そう思つてもらつても構わない。」

「じゃあ、もらつてやるよ。でも、これでチャラじゃないからなー」「まだ何か欲しいのか。」

「だから、修理代！それに普通はお詫びつて言えば菓子折りだろ！」「わかった。それは明日にでも届けてやる。その代わり、それをつける。」

男はそのブレスレットを腕に通した。

街燈にかざして見ても、輝く石に囲まれた地味な石は灰色に濁つたままだ。

……まるで、俺自身のようだ……

男は自嘲の笑顔を振り払つように頭を大きく振つて、振り向いた。

「これでいいだろ。」

そこには、すでに小夜子の姿は無かった。

翌日、男はコンビニのレジで『愛想』を売っていた。

田の前の客はもう三十分もわめき続けている。

男は怒りを腹に押し込み、笑顔を装備した。

「申し訳ございませんでした。」

何度もうして頭を下げただろう。そして、すでに退勤の時間を大幅に過ぎた俺は、いつ帰れるのだろうか……

ふつふつとした怒りと戦いつつ、男はさらに深く頭を下げる。彼が店で笑顔の仮面を脱ぐことは無い。それも仕事の内だという事は重々承知だ。

たとえ同じ話を延々とリピートするクレーマーに会おうとも、決して笑顔を崩さない事がプロの証だと彼は考えていた。

「ともかく、返金してもらえるんだろうね！」

クレーマーはやっと終わりの言葉を口にした。

「はい、そのように対応させていただきます。」

男は手早くレジを繰った。

「本当に申し訳ありませんでした。今後はこのようなことが無いよう……」

「いいよーもう一度と来ないから。」

客はマーカル通りの詫びの言葉を終わらじまで聞こうともせず、大股で店を去った。

男はもう一つのレジを打つて、若いバイトに声をかけた。

「じつち、終わつたから。おれ、もうあがるから。」

「あー、お疲れっす。」

男は気の抜けた挨拶を終わりまで聞こうともせず、大股でその場を去つた。

更衣室に飛び込み、引きちぎるよつて制服を脱ぎ捨てると、ポケットに入れておいたプレスレットが床に転がり落ちる。

男はそれを拾い上げ怒りのままに壁に投げつけようとした。だが、大きく振りかぶった腕を振り切ることはしない。

いくら更衣室とはいえ、ここはまだ店の中だ。

男は、その中で一番輝いて見える石をパチンと指ではじいて、荒

帰りの車を走らせながらも、その胸にとどけた怒りが静まることは無かつた。

彼がストレス発散のために向かう先……それはカラオケや、居酒屋なんて小洒落たものじゃない。内向的で下戸の彼は、それらに心癒されることとは無かつた。

まして、スポーツで怒りを燃やしつくしてしまって事もない。彼が向かつたのは車道からは少し奥まつた林の中。そこは不法投棄でがらくたがあふれかえつた「ゴミゴミ」とした空間だ。

「おお、これがいい！」

今日の彼の獲物は、右手が外れているくせにつんと澄ましたマネキン人形だ。

両手でその足首を持つて振つてみると、程よい運動量と破壊力がその腕に伝わつた。

「つたく、ふざけんじやねえよ、あのクレイマーが！」

手近な冷蔵庫にマネキンを振り下ろす。

ゴボン！

いやな音がして、その澄ました顔が大きく砕けた。

「みんなして俺をバカにしやがって！」

同期たちが次々と本部勤めに上がつて行く中、彼だけがいつまでも小店舗勤めの一社員のままだ。

ガゴン！

マネキンの肩から上が不自然に曲がつた。

「だいたい！あのバカ店長めが……」

クレーマーに必死で頭を下げているその間、あいつは休憩室に隠れていやがつた！

その怒りはマネキンの頭部を完全に砕きとばした。

周りに罵りの言葉と破壊をまき散らしながら、男は狂ったように

暴れ続けた。

男が呼吸で肩をはずませながら立ち止まつた時には、かつてマネキンだったそれはむき出しになつた骨組と、砕け残つたFRPの塊になり果てている。

それを満足げに「ミの山に放り込み充足のため息をついたそのとき、男は今まで気付かなかつた『人の気配』を感じて振り向いた。

「……！」

そこには、風呂敷包みを下げた昨夜の少女が立つていた。

「もういいのか。」

いつからそこにいたのかは知らないが、男の破壊行動を見ていたにもかかわらず、その美しい顔は凍つたように動かない。

男はそれが蔑みなのか、ただの無表情なのかを読みあぐねていた。

「それは楽しいのか？」

彼女の声に責める感じは一切ない。ただ事実確認をするためだけの事務的な口調だ。

だが男には、それが責めの一言のように感じられた。

「なんだよ。俺を警察にでも連れて行こうつていうのか？それとも『アブない人』だつて誰かに言いふらすのかよ。」

「私は、楽しいのかを聞いているだけだ。」

男はやつと彼女の無表情はただの無表情であり、質問には質問以上の意味は無い事に気付いた。

「楽しくてやつてるわけじゃねえよ。」

「では、怒りがすつきりするのか？」

「まあ、多少はな。」

「不可解だな。」

彼女の質問は終わつたようだ。

今度は男が疑問を投げかける。

「お前は、なんでここにいるんだよ。」

「それは哲学的な質問なのか？」

「哲學的？俺はただ、この場所にいる理由を聞いただけだぞ。」

「理由が。お前がここにいるからだ。」

「ストーカー？」

「違う。観察はさせてもらつていいがな。」

「そういうのをストーカーって言うんだね？」「

「違うぞ。べつに私は、お前に恋愛感情を抱いてはいないからな。微妙に会話がかみ合わないもどかしさに、男は軽い怒りを覚えた。少女はそんな違和感さえ気にせず、手もとの風呂敷包みを男に差し出した。

「なんだよ、それは。」

「カシオリだ。あと、これはシュウリダイだ。」

少女はポケットから帯封がついたままの諭旨を無造作に取り出し、風呂敷の上にポンと置いた。

「足りるか？」「

足りなければもつとくれるつもりか？ただのおかしいガキかと思つていたけど、こいつ、一体何者なんだ。

男は恐怖を隠すかのように、ぞんざいな態度でそれを受け取つた。荷物を渡して身軽になつた少女はくるりと踵を返し、歩き出した。

「おい、観察とやらはいいのかよ！」

そのあつさりとした態度に男の方が思わず聞いてしまつた。

「お前のプライベートには興味がないんでな。」

小夜子は振り返ることも、立ち止まることもしなかつた。

「じゃあ、俺の何に興味があるんだよ…」

「怒り。」「

ざあつと林を吹き抜ける風が、その声を男の耳に届けた。

次の日も、彼はコンビニで愛想を『売つて』いた。

「口一口と笑顔でレジを打つ彼の耳に、耳障りな怒声が聞こえる。振り返ると隣のレジでは、弁当の空き容器を振りかざしたおばちゃんが、若いバイト君を怒鳴りつけていた最中だ。

「だから、ここのお店で買ったものだつて言つていいでしょ！」

男はグッと笑顔に力を込めた。

「お客様、お話は私がお伺いいたします。」

その声に、おばちゃんはバイト君から男へと標的を移した。

「ここで買った弁当、腐つてたんだけどねえ！」

「失礼ですがお客様、そちらはいつお買い上げのものですか？」

「そんなこといちいち覚えてないわよ！だから、レジやつてた人を呼んでつて言つてるの！覚えているはずだから。」

言つてることがむちゃくちゃだ。口うちの都合なんて一つも考えちゃくれない。

それでも、彼はプロとしてのプライドと、その笑顔だけは決して崩すつもりはなかつた。

「レシートはお持ちじゃないですか？基本的に返金の際は……」「レシートはもらわないの。財布がパンパンになつちゃうでしょ。」

「おばちゃんはこちらの話を聞く気は毛頭ないようだ。早口氣味にまくしたてる。」

それは店への苦言に始まり、田那の愚痴、店の話に戻つたと思つたら、今度は近所付き合いの愚痴……とりとめがない。

彼はその笑顔に、よりいつそうの力を込めた。

「失礼ですが、お客様……」

それにつづく言葉は彼にとつては全くの予想外。おそらく、その場にいる誰にとつてもそうであつただろう。

「レシートがなきやあ確認の取りようがないだりつよ。常識もないのかよ。」

店内の空氣が一瞬にして凍りついた。おばちゃんはアホみたいに口を開けたまま、立ちつくしている。

男の表情が笑顔のままひきつった。

「その弁当だつて、冷蔵庫に入れたまま忘れてただけだろ。いくら防腐剤まみれだつて、それじゃあ腐るのは当たり前だろが！」

店では決して見せなかつた彼の本音が今、それを押しこめていた腹の中からあふれて逆流している。

「あほみたいにこつち見てんじゃねーよ。お前も、お前も、おまえもだ！」

口では悪態をつきながらも彼のプライドだけが、かろいじて笑顔を保つっていた。

騒ぎを聞きつけた店長が奥からひょこつと顔を出す。

「無能店長！ やつとお出ましかよ。いつもいつも、面倒事は俺に押しつけやがつて……」

男は固く口を押さえ、カウンターを飛び越えた。

もはや笑顔は砕け散り、男は泣き顔だ。

店を飛び出し、走る。

すれ違う人にぶつかり、よろよろと車をよけながら……彼がたどり着いたのは駐車場の、自分の車の前だつた。

「終わりだ……何もかも。」

プロとしてのプライドと、笑顔といつ装備を打ち碎かれ、おそらくはこれからクビになるであろう彼はボンネットに取りすがるよつにして泣き崩れた。

涙とともに、彼の本質である『怒り』があふれ出す。

「畜生、もう知らねえよ、あんな店！」

ボンネットに……もちろん隣の車のボンネットに、怒りを強く蹴りこむ。

バオン！とボンネットがたわみ、微かに傷がついた。  
これじゃ足りない……男は車を破壊するにふさわしいモノを探そうと、振り向いた。

「……！」

そこには昨日と同じように小夜子が立っていた。

相変わらずの無表情で、男を責めるでも憐れむでもなく『見てる』だけの小夜子。

今日は一人ではなく、へらへらと意味不明に笑う少年を傍らに従えている。

「なぜ、自分の車を蹴らない？」

「彼は冷静だからだよ、小夜子ちゃん。怒つているように見えても、ちゃんと自分が損しないように計算できるぐらいに、ね？」

男は少年が背中に掲げた悪魔的なハネに心をとらわれ、答えるどころではないようだ。

小夜子に対しても幾度か感じた恐怖の正体が、いま田の前にある。

「あれは、お前の仕業かよ！ ふざけんな……」

言葉とは裏腹に、彼は震える膝でじりじりと後ずさつた。

「私は何もしていない。それが限界を迎えただけだ。」

小夜子が指差したプレスレットの真ん中で、あの地味だった石が

強い輝きを放っていた。

鼻先に近づけるようにしてみると、口はまるで男の中から吸い上げたように、ねどりとした膚にも似た黄色に変わっている

「なんだよ、これ、気持ち悪い！」

男はブレスレットから素早く手を抜くと、それを小夜子に投げつけた。

「お前ら、俺をどうする気だよ。殺すのか？」

少年がオーバーリアクションでそれに答えた。

「殺すなんてとんでもない。僕らは、運命に書きこまれた死の瞬間に立ち会うだけさ。」

「死の……やつぱり俺を殺す気じゃねえか！」

「だから、殺さないってば。僕らの仕事は、君の魂を回収する。ただそれだけ。」

「回収？俺の魂をどうする気だよ。」

「んー、企業秘密だから詳しくは言えないんだけど、とある工場で細かく碎かれて、再利用するんだよ。」

小夜子の形良い唇が抑揚なく動いた。

「心配するな。死は全てを等しく無に帰す。」

男の体が恐怖に突き動かされた。車に飛び込み、素早くエンジンをかける。

「いやだ……死にたくない！」

男は死神たちから逃げようと、アクセルを踏んだ。

車は怒ったように急発進したが、少年は小夜子をふわりと引き寄せたそれをかわした。

勢い余った車が駐車場の中でぶつかり、ほかの車をなぎ倒し、小さな炎を吹く。

男の人生のラストシーンが炎に包まれていく中、すでに彼に対する興味を失くした小夜子は、手の中の黄色い石をじっと見つめていた。

「これも、きれいとは言い難いな。」

「でも、ちゃんと『怒』の黄色だし。大丈夫、  
小夜子はただ、じつと石を見つめていた。  
大丈夫。」

### 第3章 「哀」

けだるい静寂が支配する深夜のファミレスに小夜子はいた。

件のチャラ男はきちんとハネをたたみ、まったく普通の人間のような顔をしてテーブルの向かいに座っている。

だが小夜子の関心は少年を飛び越え、少し離れた席に座っている一人の若い女に注がれていた。

テーブルの上を使用済みのグラスで埋め尽くしながら、女は同席の友人に繰り言を垂れ流している。人間とは異なる聴覚を持つ小夜子には、そのすべてが聞こえた。

「もう、彼どりは疲れちゃったの……」

彼女の話は彼氏の浮気と暴力と、それに耐え続ける自分のエピソードで成り立っている。友人が「疲れちゃったの」を聞かされるのはすでに8回目だ。そして、次の言葉はこれまた8回目の「でもね、別れられないの」だろう。

それを確認しようとする小夜子の視界を、少年が遮った。

「小夜子ちゃん、あ～んしてみ？あ～ん」

ハンバーグの一かけらを小夜子に突きつける。

「そんな臭いものはいらん。」

「バカだねー。これはおいしそうな匂いつて言うんだよ。」

少年は自分でそのハンバーグを頬張った。

「お前は、本当に人間の真似をするのが好きだな。そして、人間をよく知っている。」

「真似をするからよく知ってるんだよ。ほら、あ～ん」

今度は小夜子も素直に口を開けた。

「ふむ。タンパク質と脂質の味だな。微量組成のアミノ酸は……」

「うまいくて言いたいのか。かわいいねー。でも、人間の言つ『うまい』つてのはそういう事じゃないんだよ。」

「……不可解だ。」

カツプルと勘違いしたのか、店員が恥ずかしそうにラストオーダーを聞きに来た。

「追加は無い。結構だ。」

店員はぺこりと頭を下げるが、愚痴を言っている女のテーブルに向かった。

少年は咀嚼していたハンバーグを飲み下す。

「今度はあの女か……でもあれ、ただの『可哀そう女』じゃん?」

「可哀そう……それは『哀しい』とは違うのか?」

「まあ違うっちゃあ違うし、似てなくもないけど……」

「違うものなのだな。じゃあ、どう違うのか教えてくれ。」

「説明できるもんじやないんだよ。そうだなあ……成分とか組成とか言わずに、『つまらない』って言えるよつになればわかるんじゃないか?お前にも。」

「また不可解な事を言つんだな。」

「そうだな。不可解だな。」

少年はそれ以上の答えを小夜子に言えはせず、ハンバーグの残りを口に放り込んだ。

彼女は十分に哀しい女だ。

ともかく男運がない。初めは優しい顔をして近づく男たちは、しばらくすると必ず浮氣か暴力で彼女を苦しめる。親切な顔をして相談に乗ってくれる男も結局は体目当てで、一度寝ては捨てられる。彼女の男遍歴はその経験値とは裏腹に、実りの無いものだった。そしてイマ彼も……彼女は今、彼のマンションの真下にいた。見上げると一階の彼の部屋の窓には、温かな光がともっている。夜風に冷えた体を温めてくれるそのぬくもりに向けて、彼女は携帯をかけた。

電話に出た男の声には、軽い違和感の香り。

「どうしたんだよ、こんな時間に……」

「あのね、友だちとお茶してたら終電終わっちゃって。今から行つてもいいかな?」

「今? 今……今からはまづいな。」

「どうして?」

「えーと、武田! 知ってるだろ、後輩の武田。今あいつン家にいてさあ、家行つても誰もいないから!」

「ふーん。そうなんだあ」

「そうそう! だから無理。ごめんな。」

見上げた窓の明かりが白々しく消えた。

彼が決して合鍵をくれなかつた意味を、そして、訪問の前には必ず電話させるその意味を彼女は薄々気づいていた。そして、あの温かい光が彼女を受け入れなかつたその意味も。

携帯をぱたんと閉じた彼女の瞳には、すでに涙があふれていた。

「泣いているのか。哀しいのか?」

いつからそこに立っていたのか、小夜子は女の眼前に突然現れた。

その驚きがあふれ出す涙をのみこみ、女は小さく狼狽する。

「何だ、泣かないのか。哀しくなくなつたのか？」

小夜子の無遠慮な質問にびくついたえていいのか分からず、女は立ちつくしていた。

「お前は、なぜわざわざ哀しくなることをするんだ? いきなりここにきても拒絕されることを知つていいんだろ? 哀しいのが好きなのか?」

質問ばかりの小夜子に、彼女のボルテージがパラメータを振り切つた。相手は見ず知らずの、しかも年端もない少女だという事もお構いなしに、わめき散らす。

「私だって幸せになりたいのよ! なのに、寄つてくるのはあんな男ばかり……哀しいのが好きなんぢやないの! 幸せになりたいの! 幸せになりたい……のか?」

小夜子の無表情の上にほんの一瞬だけ浮かんだそれは、明らかな困惑の表情だった。

「……本当に何を願つているのかは、石が知つている。」

小夜子は彼女にペンドントを手渡そうとした。

纖細で手の込んだ銀細工のトップは、彼女好みのエンジニアのデザイン。だがそこにはめられている石は、銀の輝きには不釣り合いなくすんだ灰色だった。

用心深い彼女は自分好みのそれにも、すぐには手を伸ばさうとしない。

「なにそれ。雑誌の後ろとかによくあるあれ? 幸せを呼びます、つてあれ?」

「そういう類のものではないな。付け加えておくと、靈感商法といふものでもない。ただ、これをつけて欲しいだけだ。」

「怪しそうでしょ! そんな怪しいものいらないわよ。」

「じつちを見る。」

突然の小夜子の強い口調が女の心を絡め取つた。

「手を出せ。そして、これをつける。」

さらに強いそのまなざしが彼女を侵してゆく。

女には、小夜子に逆らひつすべは無かった。

「あんまりそういう『力』を使うなよ。」

女を見送る少女の傍らに、コウモリのハネが降り立つた。

「あれを受け取つてもらつためには仕方がないだろ。」

少女は相変わらずの無表情に見える。が、少年は那些細な変化を見逃さなかつた。

「もしかして、イラッとした?」

「イラッとする、か。」

少女は漆黒の瞳を閉じて、頭の中でその単語を反芻した。

「自分の思い通りに行かないときに発生する感情だな。確かに自分の思い通りにはいかない状況ではあつたな。」

「そうじゃなくて!『イラッとした』かつて聞いてるんだ。」

少年は、いつものようにへらへらと笑つてはいなかつた。

「お前の質問は……不可解だな。」

小夜子の顔はすでに、完全なる無表情を取り戻している。

「そうだよね。不可解だよね。」

少年は取り繕つかのように、へりつとわらつた。だが、少女の堅い表情には何の反応もない。

小夜子は規則正しい歩調で歩きだした。

「あれ、どうか行くの?」

「観察だ。人間をよく見ると言つたのはお前だらう。」

「そうでしたネ。ま、がんばつて。」

コウモリのハネが大きくはためき、少年の姿を、星すらも見えない都会の空へと連れ去つた。そして、小夜子の足取りは何者にも乱されることなく、その姿を星のようすに輝く街明かりの中へと連れ去つた。

「不可解だ。」

小夜子がこのセリフを口にするのは、果たして何回目だろ。彼女は今、ファーストフード店の一階席から隣のビルを覗き込んでいた。

もちろん、人間の視力で考えてはいけない。彼女は隣のビルの、おしゃれなレストランの八番席に座っている女を、ピンポイントで観察している。

女は涙で声を震わせながら、彼の浮気に耐えた日々を若い男に語っている。相手の男は彼氏の仕事の後輩で、実にまじめで実直そうな青年だ。

「昨日も彼つたら、あなたの家にいるなんて嘘を……」

涙ながらの女の言葉に、小夜子は小さな違和感を感じた。その正体を確かめようと、窓に顔を近づける。

窓ガラスに顔をすりつけている可憐な少女の背後で、聞きなれた声がした。

「少しばは人間らしい振る舞いってのも学んでくれよ。」

ハネを隠し、ハンバーガーを山ほど乗せたトレーを抱えた彼は、どこからどう見ても普通の男子。彼女を待たせたお詫びに、ハンバーガーで機嫌を取ろうとしている彼氏、といった風情だ。

「ああ、チャラ男。いいところにきたな。」

「何が？」

少年は小夜子の隣に陣取ると、一つ目のバーガーの包みを開けた。「幸せになりたいと言うから、あの男と会えるように運命を操作した。」

「ふん? なんでカレ?」

「あの男はあの女に好意を持っている。彼女もそれに気づいているようだ。以前に告白があつたのかもしね。」

少年は一つ皿の包みに手をつける。

「それに彼女の話に共感して、腹を立てている。自分なら決して浮気はないと何度も言っている。彼ならあの女を哀しい皿に合わせることはないさうなのだが?」

「すごいねえ。名探偵みたいだねえ。」

少年の言葉にちょっと呆れたような響きがあつたのは、決して気のせいではないだろ?」

「で、名探偵さん。あの女の人は今どんな気持ちなんですか。」

その女は明らかに泣いている。相手の男が差し出すハンカチを受け取りながらも、彼氏の悪口だけを吐きだし続けている。

「泣いているんだから、哀しい?いや、微かに喜びの赤……黄色も見えるような気がするんだが……」

「ヒントをあげよつか?」

少年は小夜子に二つ皿の包みを差し出す。小夜子は素直にそれを受け取つた。

「あの女は『私つてかわいそつなのよ』つてことをアピールすることで、他人から同情してもらう事が大好きです。」

「ふむ、やはり幸せにはなりたくないんだな。」

「ノンノン。幸せになりたいのは本當だよ。『私は』こういう幸せを理想としています』つてのはあつて、その幸せに到達できない自分がかわいそうだと思つてるんだよ。」

「ふむ、不可……」

「はいはい、不可解だよね。とりあえずそれ、食べれば。」

小夜子にとつてハンバーガーは脂質と脂肪と炭水化物、そして何種類かの微量成分の味しかしなかつた

「…………そろそろだな…………」

小夜子は地上に着いてからずつと隠していたその羽を、まるで伸びでもするかのように大きく広げた。

まさしく濡羽色のそれは、明るい月に照らされた夜空のように青みがかった漆黒。まがまがしい闇の深淵のように、見るモノを不安にさせる美しさを宿している。

その大きな翼をはためかせ、少女は哀れな女の目前に降り立つた。

「ここは……」

ビルの屋上は夜空からの強い風に吹かれて寒々としていた。

少女の視界に驚きで目を見開いてしまった女の顔が映る。

「良かつた。まだ死んでいなかつたな。その回収に来た。」

ふと、素朴な疑問が小夜子を捕らえる。

「ここで何をしている?」

女は屋上のフェンスを乗り越えた外側、狭い空間に張り付くように立っている。

「死ぬのか? いわゆる自殺といつものだな?」

無遠慮な質問を投げかける小夜子は、その大きな羽でホバリングしながら女の眼前に浮かんでいる。

コウモリが、軽やかな羽ばたきの音とともに小夜子の隣に立つた。

「小夜子ちゃんつてば、あんまり人間を驚かせちゃダメだよ。」

「すまんな。次は気をつける。」

「それに、彼女は自殺する気なんかこれっぽっちもないよ。」

「ない…………のか?」

じゃあ、わざわざ有刺鉄線で搔き傷を作つてまでここに立つている、これは…………?

「それはねえ、自殺…………。」

「「「ここ? 遊びで死ぬのか。」」

「死なないよ。彼氏が、この前一緒に飯食つてた男か、……ともかく誰かに電話しているはずだよ。『私、もう死んじゃう』ってね。」

「それは、何か意味がある行為なのか？」

「あるよ。彼女にとつてはね。助けに来てくれる王子様を待つ、悲劇のヒロイン気分が味わえる。」

少年は、ちょっとサディスティックな眼差しで女に微笑んだ。

「さあ、時間だ。」

扉が開き、誰かが屋上に駆け込んでくる音がした。

女は助けを求めて振り向く！

だが、そこは振り向くには狭すぎた。

足を踏み外した女は空中を泳ぐように両手をばたつかせたが、落下する体を支えるには何の役にも立たない行為であった。

小夜子の手の中には刹那に女の首筋から引き抜かれた、あのペンダントがあった。

そこにはめられている件の石は青黒く輝いている。それはおよそ生命と呼べるもののが、ただ一つもない深海の闇のように、見るモノを寂寥とした気持ちにさせる色だ。

「私の羽根に似ていないか。絶望の濡羽色だ。」

いつも通りの無感情に見える彼女の心が静かに動くのを、少年は見逃さなかった。

「絶望？俺にとっちゃあお前の羽根は、最高に美しいけどな。少なくとも絶望なんかじやねえよ。」

「励ましなら結構だ。」

少年に背を向けた彼女の瞳は、石の輝きを映してしまったかのように暗く沈んでいた。

「小夜子ちゃん、小夜子つてばー小夜……クルエボー！」

何と呼び掛けられようが、その声は凍てついた彼女の心には響かない。

一羽の鳥が真夜中の空へと大きく羽ばたいた。

その鳥が病室で眠る少年のもとを訪れたのは、細い月が頬りなく照らす夜だった。

閉め切った病室に突如巻き起しつた羽風を顔に受けて、彼は目を覚ました。

窓辺には羽を生やしたシリエットが佇んでいた。

「天使……？」

消灯後の暗い病室の中で、外からの光に輪郭を縁取られた姿はあまりに美しい。

だが、その声はどこか事務的で、固いものだつた。

「そんなものは、お前たち人間が勝手にイメージした幻想だ。」

小夜子はベッドわきの常夜灯に羽をかざして見せた。黒い羽根の一枚一枚が光を受けて黒く輝く。

「お前たちの言つ『天使』は、こんな黒い羽根をしてはいだらう。むしろ、この色なら悪魔と呼ぶ方がふさわしい。」

「天使つてことにしておこうよ。こんなにきれいなんだから。」

彼は手を伸ばして、その柔らかな羽根の質感を確かめた。

そんな彼の横顔は儚げで青白く、今宵の細い月のように頼りない。長い闘病生活の終焉に訪れた異形の少女が何を意味するのか、わからないほどバカではないだろう。だが、そんな彼女にさえ柔らかな笑顔を向ける、そんな彼の方こそ……

「きれいなのはお前の方だ。」

小夜子は思わず口を突いたその言葉に、合理的な解説を求めた。

「この場合のきれいとは、姿形の事を言つていいのではないぞ。もちろん、そこも美しいが、華やかな美しさではなく……」

少年が、ふつと大きく吹きだした。病室に朗らかな笑い声が満ちる。

「私は、何か面白い事を言つたのか？」

少年はヒューと息を吸つて、笑いで乱れた呼吸を整えた。

「そんなこと、いちいち解説してくれなくてもいいんだよ、天使さん。」

「そのむずがゆい呼び方はやめてくれ。小夜子と呼べ。」

少年が大きく息を吸つて、再び笑いだした。

「お前は楽しそうだな。お前なら、私に教えてくれるかもしれぬ。小夜子はメンズチョーカーを少年に渡した。そのゴツツとしたシリバー製のヘッドにはめられた灰色の石は、やはりくすんでいる。

「これを受け取つてくれ。そして私に、『楽しい』を教えてくれ。」

「これは、『楽しい』を教えてあげるお礼つてこと?」

「逆だ。それをつけてくれるお礼に、私がお前の望みをかなえてやる。」

「望みねえ……」

「何でも言え。死の摂理を捻じ曲げること以外なら、何でもかなえてやれるだ。」

「じゃあ、お願ひしちゃおうかな。」

少年はいたずらを思いついた時のように、くすくすと笑つた。

「僕が死ぬその瞬間まで、そばにいてよ。」

小夜子にはその言葉の意味がよく解らなかつた。いや、文法的な意味はよく解つている。だが、そこに含まれている少年の真意を測りかねていた。

「私には『そういう機能』はついていないぞ。『そういう相手』を斡旋して欲しいのか?」

「そういう?……あ、やだ、やへらしへ。」

それは小夜子が生まれて初めて味わう『混乱』だ。彼の言葉は單純に思えるのに、何かしつくりと来ない。ひつかけ問題のようにも感じられる。

「別に『そういう』事はいらないよ。ただ僕と一緒にいて、楽しい時には笑つてくれればいい。そうすれば君も『楽しい』が解るし、一石二鳥だろ?」

「うむ？ お前がそれでいいというなら……」  
少年がカラカラと笑い声をあげた。

少年が最初に要求したことは『呼び方』だつた。

「タケ。タケって呼んでよ。」

「そんな気やすい呼び方は、親密なもの同士がするものだろ。」

「いいんだよ。だつて僕も『小夜子』って呼んでいいんでしょう?」

「そんな気やすい呼び方をしろとは……うむ、言つたな。確かに。」

タケは声をあげて笑つた。

タケはよく笑う。大きく息を吸つて、また笑う。

回診に来た医者に軽口を叩いては笑う。売店のおばちゃんにからかわれては笑う。そして、友人たちにも。

今もタケは見舞いに来た友人たちの輪の中で、ひとりわ大きな声で笑つてはいる。小夜子はそんな彼を、つぶさに『観察』した。

友人たちはこぞつてタケを笑わせようとしているかのように喋り続ける。その内容は実にたわい無いものだ。

クラスメイトの失敗談。ゲームやドラマの話題。先生のモノマネなんて裏技もあつて、タケは笑い続ける。

小夜子はそんな彼の笑顔を真似ようと、顔の筋肉を動かしてみた。目じりをグッと引き下げ、口角はくいっと引き上げる。

「小夜子、ひつどい顔になつてる!」

タケと友人們は腹を抱えるようにして笑い転げた。

「そうか、ひどいか。」

笑顔を無表情に戻す見事な早技に、笑いはさらに大きくなつた。短い面会時間が終わるまで、彼らはひたすらアホのように笑い続ける。

小夜子だけが、その場に漂う小さな違和感に心をとらわれていた。

「お前、早く帰つてこいよな!」

帰り際、友人がタケに言つた言葉に、小夜子の中の違和感は確信に変わつた。

「お前は、あいつらに本当のことを言わないつもりか。」

「言わないよ。あいつらには最期まで笑つていて欲しいんだ。」

「ふむ。誰かを泣かすのがいやなんだな。お前は良い人間だ。」

タケはひとり大きく息を吸つて笑つた。それは先ほどとは全く

異質な、小夜子には理解できない『自嘲』の響きを含んでいた。

「良い人間な訳ないじやん。僕は残された時間を、自分が楽しい気持ちで過ごしたいだけなんだから。」

「不可解だな。笑うのはあいつらなのに、楽しいのはお前なのか。」

「そうそう。そして楽しい気分で僕がいなくなつた後に、あいつらは僕のために泣くんだ。ひどい人間だろ？」

「お前の気持ちは……矛盾しているな。誰かを泣かせたくない気持ちは本當だ。だが、自分のために泣いて欲しい、とも思つていて。」

彼は笑顔を消して、真剣なまなざしを小夜子に向かた。

「小夜子、教えてよ。僕は死んだら天国へ行くの？」

「そんなものは人間が勝手にイメージした幻想だ。死は、全てを等しく無に帰す。」

「夢も希望もないなあ。『無』かよ。……でも、本当に無になるならいいのに……」

「無になれるぞ。この私が言うのだから、間違いない。」

「そうだね。僕は『無』になるんだろうね。でも、本当の『無』には……」

タケは小夜子からついと目線を外し、どこか遠くを見るように中空を睨んだ。

それを見ている小夜子の胸にざわめく、なんだか落ち着かないような気持ち。それが不安だという事に彼女は気付かなかつた。

「タケ、笑え。楽しい事をしよう！欲しいものは何でも出してやるぞ。」

彼はいつものバカ笑いとは違つ、静かな笑みを小夜子に向けた。

タケの母親が病室に入ってきたのは遅くなつてから。面会時間はぎりぎりだった。

息子はすでにベッドで寝息を立てている。その傍らには既知らぬ少女が座つていた。

「タケは十八時に夕食をとつた。そのあと夜の投薬をうな、先ほど眠つたばかりだ。」

報告でもするかのよつな小夜子の口調と存在に、彼女は違和感と戸惑いを感じた。

「あなたは……」

「私が、私はタケの……」

小夜子はタケとの関係を表すにふさわしい言葉を探す。

「彼女のようなものだ。」

タケの母親は目を丸くして、その場に立ちつくした。

「タケアキつたらいつの間に……でも、この子は……」

小夜子はそんな彼女のことを見い人間だと思つた。おそらくは息子の最期のわがままになるだろつと解りながら、遺される少女のことを思つて葛藤している。

彼女が呑み込んでしまつた、その言葉に小夜子は答えた。

「心配はいらない、私は全て知つてゐる。」

「知つてゐるのに……この子と付き合つてくれるの？」

「私はタケのことを解りたい。だから一緒にいるのは、私自身のためでもある。」

タケの母親はその言葉をざつと解釈したか……両の手からぽりぽりと涙をこぼした。

「泣くな。泣くと、タケは楽しくない。」

小夜子はその涙を自分の袖口で拭つてやつた。それで口を濡らす、そのしづくは温かい。

「面会時間はあと十分程度残っている。母上殿は今しがらく、タケのそばにいてやるがよいぞ。」

「あなたは。帰つてしまつの？」

「私は……」

小夜子は病室の入り口で振り返つた。

「いつでもタケのそばにいる。」

今宵は新月。一羽の鳥が紛れ込むには十分すぎるほど漆黒が広がつてゐる。

屋上へと続く非常階段をのぼりながら、小夜子はその翼を広げた。

漆黒の闇空でそのコウモリは待ち構えていた。

「よう、小夜子ちゃん。」

「何か用か。チヤラ男」

「やだなあ。小夜子ちゃんのことが心配で、来たに決まってるじやん？」

「心配されることなど何もない。」

小夜子は羽音を立てて飛び上がった。ここからはタケの病室の中がよく見える。消灯後の、やさしい闇の中で彼は安らかな寝息を立てていた。

「そう。何も……ない。」

「ふうん？ ま、いいや。どう？ 人間觀察は。」

「難しいな。人間には矛盾が多すぎる。『嬉しい』のに泣く。『怒り』を感じているのに笑う。それに……」

小夜子は窓の中の青白い寝顔を見つめた。

「その矛盾が許せないんだ？」

「ああ、許せんな。タケには楽しい気持ちでいてもらわないと困る。」

小夜子は羽を大きく震わせた。

「よりよい『樂』を、私は手に入れなくてはならない。」

「本当に、それだけ？」

「それだけだ。私の中に矛盾は無い。」

凛とした小夜子の横顔は、何者にも揺るがされることはないと見える。

「矛盾は無い……か。それなら結構なんじゃない？」

「コウモリは見えない月に向けて大きく羽を動かした。」

「マルシエラゴー！」

久しぶりに呼ばれた、異界での自分の名前に振り向いた彼の眼に

は、小夜子が何だか小さく見えた。

「タケは……どうしても死ぬのか。」

「何言つてゐるんだよ。その瞬間がいつなのか、まで解つてゐるはずだろ。」

「……解つてゐる。確認のためだ。」

「運命に書きこまれた死の瞬間は、何者にも変えられはしないんだぞ？」

「解つてゐると言つてゐるだらう。本当に確認のためだ！」

「コウモリの目が、優しい三日月のようになり、すうっと細くなつた。」

「クルエボ……お前は優しすぎるよ。」

月の無い夜を、その残り少ない命で照らさうとしてもしてゐるかのよつこ、タケの寝顔は白く、静かだった。

数日もすると、小夜子の存在は『タケの彼女』といつ事で周りに知れわたった。

彼女は『カレシ』のそばに常に寄り添い、その笑顔を飽くことなく『観察』した。

タケは相変わらず笑っていた。そんな彼のもとへは人が集まる。今日は隣の病室の、若いあんちゃんが話相手だ。

「それでも、どうやってこんな美人の彼女、捕まえたんだよ。ナンパですよ。ま、ウチの場合は逆ナンんですけど?」

あんちゃんは「さやはは」と、豪快に笑った。

「俺を差し置いて、おいしい目、見てんじゃねえよ。」

ちょっと乱暴なスキンシップに、タケは笑顔で応えた。

「僕、病人ですよ。もつと優しくしてくださいよ。」

「俺だって病人だよ!」

「あ、そうでしたっけ。」

笑い声がより大きくはじけた。

小夜子はそんな笑いのさなかにいて、にこりともしない。ただじつとタケの楽しげな姿を見つめていた。

昼食の時間になり、あんちゃんは自分の部屋へ帰つて行つた。タケと小夜子、二人だけの病室は静かだ。

小夜子は昼食を頬張るタケから目をそらさず、唐突に聞いた。

「ちゅー位はした方がいいのか?」

タケがゴフッとむせた。

「ちゅーなら機能的にも問題は無いぞ。私は『彼女』なのだから、そのくらいはした方がよいのだろう?」

「その言い方は、萌えるって言つか、萎えるって言つか……」

「どっちなんだ?」

「いや、いいよ。そこまでしてくれなくて。」

小夜子はずいっとタケに詰め寄つた。

「ならば、何をすればいい？何をすればお前は樂しくなる？」

「今まで、十分楽しいよ。ほら、僕、笑つてるよ。」

「ウソをつくな。お前は笑つている最中に、すぐく哀しそうな顔をする。」

タケが力なく「ははっ」と笑い声を吐いた。

「良く見てんない。敵わないよ。」

「あれは、楽しいのか、哀しいのか、どっちなんだ？」

「どっちもだよ。」

「どっちもじゃだめだ。タケには、楽しい気分でいてもらわないと困る。そのためなら何でもしてやるぞ。何をすればいい？」

タケの首筋で、チヨーカーの石がチカリと青く光つた。

その光はタケが小夜子に向けた、とびきり明るい笑顔にまぎれて消えた。

「じゃあ、もつれなら絶対樂しいって、鉄板の物があるんだけど。」

タケは部屋の隅にある冷蔵庫からカツップのアイスを取り出すと、

小夜子のすぐ隣に腰を下ろす。

「これ、ちよーうまくつてさあ。でもなかなか売つていない、とつておきのレアモノなんだよね。」

「それを食べると、楽しくなるのか？」

「美味しいものはさあ、誰かが一緒に食べてくれると、もつと樂しくなるよ。」

タケはその、ひと匙を小夜子の形良い唇に流し込んだ。

いつものように成分を味わつている余裕はなかつた。小夜子の口中でとろけていくそれは、冷たく、あまく、そして、タケの笑顔がほろ苦い。

「つまい……」

小夜子の言葉に満足そうに頷くタケをみてると、何だか鼻の奥がしおっぱいような、そんな気持ちになる。

小夜子は意味もなく窓の外へ視線をそらした。

月はもうすぐ満ちる。中途半端に大きな月が小夜子の黒い羽根に反射して、タケの寝顔に黒々とした影を落とした。

昼間は元気にふるまう彼が夜中に強くむせ込む姿を、小夜子は毎晩のように見ている。

そんなとき、彼女は小さなズルをする。彼の眠りを妨げる呼吸を

その力で鎮め、そつと髪をなでてやる。

その眠りが、せめて幸せなものであるように……

だが、今夜のそれは違った。

彼は咳と共に大量の痰を「ポポッ」と吐き出し、体をおこした。深い喘鳴と、激しい咳が彼を襲つ。

「タケ、タケ。苦しいのか。今、私の力で……」

そうしている間にも、彼は緋色の痰を「ポポポッ」と吐き出す。

小夜子は生まれて初めて『狼狽』した。タケには月が満ちるまでの時間が残されているはず。

「タケ、しつかりしろ！まだだ！まだお前の運命は終わりじゃないんだぞ！」

小夜子は自分の両ほほがぬれでいることに気づかなかつた。わずかばかりのタンパク質とリン酸塩が含まれた、この液体がなぜ、こんなに温かいのかは解らない。解らないが、小夜子は確かに泣いていた。

発作が治まつたばかりの疲労しきつたタケを、小夜子は抱きとめていた。

「小夜子……」

彼は震える指でチョーカーを外した。

「これ……返してもいいかな？」

そこにはあの灰色の石が……今は灰色ではなく、赤、黄色、青、

そして緑へと、ぐるりぐるりと色を変えながら輝いている。まるでシャボン玉のように透き通った、それでいながら、しつかりとした石の質感が彼女の掌の上に在った。

「これは……」

「これ以上は、楽しい気分でいられそうもないからさ。小夜子も、もうここへは来なくていいよ。」

「そんな勝手な言い分があるか！」

「僕は勝手な人間だよ。解つていてんでしょう？」

その言葉はどこかとげとげとしていて、普段の明るい彼からは想像もつかない絶望の響きを含んでいた。

「みんなにいい顔しているのだって、自分が楽しくしてみたいから。苦しくないふりだって、自分が可哀そつ扱いされるのがいやだから！それにねえ、小夜子……」

彼は小夜子の手を引き寄せた。

「『楽しい』を教えてあげる、なんて言つたのも、天使と友だちになつたら、もしかして奇跡を起こしてくれるんじゃないかな……つて思つてたんだ。」

彼の手は優しく動き、小夜子の肩を抱き寄せた。

「でも……やめておけばよかつた。小夜子は優しすぎるんだよ。小

夜子……僕は……」

それ以上言葉は無く、彼は静かに泣いていた。

小夜子はそんな彼の背中に優しく手のひらを押し当てて、祈りを捧げる。人間達がどの存在をさして『神』と言つているのか、彼女には解らない。解らないが……

（どうか、彼を助けて……）

そんな想いを軽く嘲笑するかのよつて、室内には起じるはずの無い羽風をおこして「ウモリが現れた。

「祈り……かよ。無駄なことしてるねえ。小夜子ちゃん。」

小夜子はタケをかばうように、腕に力を入れる。

「何しに来た。お迎えにはまだ早いだろう。」

「いやいや、あんまり茶番なんで笑いに来たんだよ。そんな祈りを聞いてくれる相手がない事も、運命は絶対に書き換えられない事も知ってるくせに……」

「タケにそういう話を聞かせるな！」

「小夜子、僕は大丈夫だから。」

タケは小夜子の体を柔らかく突き放した。

「もう、行きなよ。」

「そうだよ、小夜子ちゃん。立派な石を手に入れたじゃん。もうここには用は無いだろ？」

小夜子は手の中で透き通つた光を放つ石を、そして涙でぬれたタケの顔を見た。

「まだ行かない……この石は未完成じゃないか。」

小夜子はチヨーカーをタケに突きつけた。

「苦しくてもいい。哀しい思いも平氣だ。私はタケの全てが見たい。タケのきれいな思いも、みつともなく生きあがく姿も、全部私が覚えておいてやる。だから……」

月明かりが雲にかき消され、小夜子の涙を隠した。

「最後まで……私はここにいる。」

空に張り付いた銀盆が夜空を濡羽色に照らしている。

夜空と同じ色の翼を広げた小夜子は、病院の屋上に所在なく座っていた。

満月は、タケの笑顔によく似ている。寂しげで、哀しげで、それでも漆黒の闇を照らそうと輝く……あれからタケは苦しんだ。衰弱していくおのれを持て余して怒り、嘆き、わめいたりもしたが、最期の瞬間に彼が浮かべたのは、やはり笑顔だった。

その笑顔を胸の内で反芻しながら、小夜子はタケから回収した石を手のひらの上で転がした。それは月の光を反射しながら時に明るく、時には暗く輝く。ぐるりぐるりと色を変え、静かに輝いている。

「赤……黄色……緑……」

どの感情も決して混ざりあつことなく、反発することもなく次々と色を変えるそれは、まさしく矛盾を抱えながらも輝く『人間』そのものだ。

飽くことなく石に見入っている小夜子の隣に、コウモリが舞い降りた。

「小夜子ちゃんお待たせ。終わつたよ。」

「そうか、終わつたんだな。全て……」

そんな彼女の顔にはすっかり、もとの無表情が張り付いている。ムルシリコラゴはそんな彼女に、おおげさなため息をついて見せた。

「『死は等しく全てを無に帰す』だつけ？ まだそれを信じてるのか？」

「信じるも信じないも……タケはもういない。」

小夜子の眼差しは手のひらの中にある小石の輝きだけを、かたくなに映している。

彼はそんな彼女の視線を奪うかのように夜空に手を広げた。

「見て『らんよ。』

人間の目では決して捉えられない風景がそこにはある。異界から吐き出された七色に輝く粒子が、まるで雪のように地上へと、降り注ぐ。

「あれは再利用の過程で出た魂のかけらだよ。」

かけらは静かに地上へと、生きているモノたちの上に静かに静かに降り積もる。

夫だった男を亡くした女の上にも、怒りっぽかつた上司を亡くしたバイト君の上にも、片思いの相手に逝かれてしまった男の上にも……

「人の上に降つたそれは、楽しかつた思い出だつたり、哀しくてやりきれない思いだつたり……さまざま感情となつて地上にとどまり続ける。」

息子の冷たくなつた手を握り締めている母親の上にも、静かに、優しく……

「小夜子ちゃんの中には、もう一かけらも、タケ君はいないのかな？」

小夜子の翼の上にも、ただ優しく降り積もる。

「タケは……いる。」

小夜子はぎゅうっと石を握りしめた。

「あいつを思い出すと、痛い。苦しい。消してしまいたい……でも、温かくて消せない。私の中のあいつは矛盾だらけだ。」

「矛盾しているのは、タケ君じゃないでしょ？」

「そうか、この矛盾は私の物か。」

「不可解か？」

「もちろん、不可解だな。だが、私はこのままがいい。ダメか？」

少年はいつものようにへラつとわらつた。

「いや、いいんじゃないの？」

大きな満月が柔らかい光で小夜子を照らしている。あの月は本当に似ている。

小夜子は月に向かつて、目じりと口角を柔らかく歪ませた。

「わらつた？いま、笑つたよね？」

「何を眠たい事を言つてゐる。帰るぞ。」

濡羽色の夜空に一羽の鳥が飛び立つた。夜空と同じ、強い青を秘めた黒色の翼で……

月の光の中で楽しげな笑い声がしたような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2288z/>

---

真夜中の鳥

2011年12月25日12時53分発行